

T a d a h i k o H a y a s h i A w a r d

社会は心を撃つ^う写真をさがしています

第
25
回

林
忠
彦
賞

フィリピン残留日本人

JAPANESE REMNANTS OF WAR IN PHILIPPINES



主催／周南市文化振興財団 共催／**KRY**山口放送 後援／読売新聞社 協賛／富士フィルム株式会社

<http://hayashi-award.com>

林忠彦賞は、山口県周南市出身の写真家林忠彦の功績を顕彰し、写真文化の振興を目的に、1991年(平成3)故郷である周南市と周南市文化振興財団が創設いたしました。

本賞は、林忠彦が晩年アマチュア写真家の育成に力を注いだことから、当初はアマチュア写真の振興を目的としてスタートいたしました。その後、写真がデジタルへと急速に変化するなど、技術や表現形態が多様化していったことを受け、より多くの写真家に支持される賞へと少しずつ見直しを図ってまいりました。そして現在では、林忠彦が「太宰治」「坂口安吾」などの作品で戦後の写真界に颯爽と躍り出た、最もエネルギー溢る時代に照準を合わせ、社会が求める、その時代を一番象徴する写真を選び出そう、をコンセプトとしています。

「社会は心を撃つ写真をさがしています」のキャッチフレーズのもと、写真表現者すべてに門戸を広げ、林忠彦の精神を受け継ぎ、それを乗り越え未来を切り開く写真家を発掘する賞をめざしているところです。

25回目となる今回は、去る1月26日に選考委員会が行われ、108点の応募作品の中から厳正な審査の結果、船尾修さんの「フィリピン残留日本人」が受賞作に決定いたしました。

船尾さんは神戸市のご出身で、現在は大阪府日守町にお住まいです。写真家としてだけでなく登山家としても活躍され、日本や世界各地の山を登攀してこられました。一方でアジア・アフリカを中心に約70か国を訪れ、各地のドキュメンタリー写真を撮り続けておられます。

受賞作「フィリピン残留日本人」は、戦前フィリピンに渡った日本人移民の子で、戦争により父あるいは両親と離ればなれとなって現地に残された人びとの姿を捉えた写真集です。戦後の強い反日感情の中、彼らは日本人であることを隠して厳しい生活を送り、日本人と名乗れるようになってからも、日本国籍が回復できない人が大多数となっています。船尾さんは偶然このことを知り、地道な取材活動を続けました。残留日本人ひとりひとりと真摯に向き合い、力強い写真で表現したドキュメンタリー作品で、選考委員会では高く評価されました。

船尾さんには心からお祝いの言葉をおおくりさせていただきますとともに、今後のさらなるご活躍を期待いたします。

受賞作品は山口放送株式会社、読売新聞社、富士フィルム株式会社をはじめ、関係各位のご協力を得て、東京、周南市、北海道東川町と巡回展示し、オリジナルプリントは周南市が林忠彦コレクションに含めて永久に保存いたします。

林忠彦賞は、多くの方々のご協力によって発展して参りました。今後とも引き続き温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

周南市文化振興財団理事長
周南市長

木村健一郎



林忠彦
(1918~1990)

わが国の写真文化の発展において、林忠彦は木村伊兵衛、土門拳、渡辺義雄各氏などの先輩写真家とともに日本写真家協会設立に尽力する一方、1953年(昭和28)には二科会写真部を創設し、以後全国のアマチュア写真家の資質向上のため終生尽力した。こうした氏の遺志を生かしてアマチュア写真の振興を目的に、1991年(平成3)林忠彦賞を設立した。

第12回からは、デジタル化の急速な進歩により多様化する表現形態に対応するため、新しい写真表現を目指す作家の参入も推し進めた。

さらに第18回より、これまでの経験をもとに、対象をプロ作家にまで広げ、時代と共に歩む写真を撮り続けた林忠彦の精神を継承し、それを乗り越え未来を切り開く写真家の発掘を目指す賞へと拡大した。

応募要項

資格：国内居住であれば、アマチュア、プロ、年齢、性別、国籍を問いません。

テーマ：自由

対象：2015年(1月1日~12月31日)の写真展、写真集、雑誌、公募等の表現媒体ですすでに発表された作品に限ります。受賞記念写真展を開催する関係上、同一作品でプリントが35~70枚程度の作品が対象です。

「写真展」応募

- ・「写真展」で展示した作品のプリントをお送りください。(展示していない作品は対象外となります。再プリント可。)
- ・プリントの代わりに「写真集」をお送りいただくことも可能です。(その場合は展示した作品がわかるように明記。)
- ・「写真展」の会場内でポートフォリオなどを置いていた場合は、そのプリントも展示作品として含むことができます。
- ・巡回展示や会期中展示替えがあった場合は該当プリントがわかるように明記してください。
- ・資料として、写真展の「案内ハガキ」や「展示風景のプリント」などを添付し、発表時期や状況がわかるようにしてください。

「雑誌」「公募」などでの応募

- ・掲載誌あるいは発表した作品のプリントをお送りください。(発表していない作品は対象外となります。再プリント可。)

「選考発表」

選考後、受賞者に通知するとともに各報道機関に発表します。(2016年2月17日発表)

授賞式は東京で行い、東京と周南市において受賞記念写真展を開催します。受賞作品は主催者が保存のため、銀塩ペーパー・全紙サイズで再制作し、林忠彦コレクションとして周南市美術館に永久保存します。

「作品の返却」

返却方法は、受取人着払いの宅配便となります。ただし、最終候補作品については、資料として作品をご提供いただく場合があります。

「個人情報」

ご記入いただいた個人情報は、林忠彦賞に関する業務以外には使用しません。

「応募・問合せ先」

林忠彦賞事務局 〒745-0006 山口県周南市花島町10-16
(周南市美術館) TEL 0834-22-8880 FAX 0834-22-8886

- ・発表状況がわかる資料「案内ハガキ・チラシ」などを添付してください。
- ・プリントの代わりに「写真集」をお送りいただくことも可能です。(その場合は発表した作品がわかるように明記。)

「写真集」応募

- ・そのまま「写真集」をお送りください。
- ・資料としてプリントを添付されても構いません。(その場合は写真集に掲載されているプリントのみが対象です。)

プリント

- ・六ツ切から四ツ切程度(インクジェットプリントも可。)
- ・できるだけファイリングした状態でご応募ください。(ファイリングできない場合は、裏面に順番を明記。)

応募用紙

- ・応募用紙に、住所、氏名、略歴等を明記し、制作の主旨を400字以内にまとめてお送りください。(自作可。)

「選考委員」

大石芳野(写真家)
笠原美智子(東京都写真美術館事業企画課長)
河野和典(公社)日本写真協会理事、日本カメラ社編集顧問
細江英公(写真家、清里フォトアートミュージアム館長)
有田順一(周南市美術館館長) 敬称略・五十音順

【締切】2015年(平成27年)12月31日必着

【賞】ブロンズ像(笹戸千津子作「爽」)及び賞金100万円

募集要項・歴代受賞作品など詳しくはホームページをご覧ください。応募用紙のダウンロードもできます。

<http://hayashi-award.com/>



写真集「フィリピン残留日本人」

船尾 修 (ふなお・おさむ)



戦前、大勢の日本人がフィリピンへ移民として渡り、フィリピン人女性と結婚、定住した。しかし第二次世界大戦中、彼らの多くは日本軍の軍属や通訳となって日本のために働いた。そのためアメリカやフィリピン人ゲリラの攻撃の的となり、戦死したり日本へ戻っていく者も多かった。

戦後の強い反日感情の中、フィリピンに残された日系2世は日本人であることを隠して暮らしてきた。学校へ行けなかった人も多く、貧しい生活を送りながら戦後を生き延びてきた。1980年代頃になって漸く反日感情も薄れ、彼らは日本人と名乗れるようになったが、父親が戦死したり日本へ帰国したため日本人であることを証明するのは難しく、実際は日本人であるにも関わらず日本国籍をもたない人が大多数である。

作者は2008年偶然フィリピンでこのことを知り、翌年から7回にわたってフィリピンの残留日本人(日系2世)を取材、記録した。各地に暮らす彼らを訪ね、現在の境遇や暮らしぶりを直接目にし、話を聞き取りながら、フローニー6×6のモノクロフィルムにより撮影を行った。

戦後70年となった昨年、日本ではさまざまな特集が組まれたが、フィリピン残留日本人についてはほとんど知られていない。作者はこの年に写真集を出すことによって人々の目に留まり日系人の国籍回復の願いがかなえられるかもしれないと、クラウドファンディングにより資金を募ってこの写真集を出版した。

残留日本人ひとりひとりと真摯に向き合い記録を重ねた取材と、それをしっかりとした写真で表現したドキュメンタリーとして、見事な作品である。

経歴

1960年 9月8日神戸市生まれ。

1979年 関西学院大学理学部入学、中退。

1984年 筑波大学生物学類卒業。在学中探検部に所属、登山の基礎を学ぶ。

卒業後出版社に勤務したが、クライミング(登山)にのめりこみ退職、アルバイトをしながら国内外の岩壁登攀を行う。

この年初めてアフリカ大陸を訪れ、30歳代前半までに合計して4年程アフリカ大陸を放浪旅行、この経験から写真家への道を志す。

30歳代半ばでフリーの写真家・ライターとなり、雑誌等に海外ルポなどを発表。

1998年 アフリカの旅を綴った著書『アフリカ 豊饒と混沌の大陸(全2巻)』出版、実質的なデビュー作となる。

この年から写真展「共棲大陸アフリカ」開催。著書『駅から登る山』出版。

1999年 この年から写真展「森の民の世界から 狩猟採集民ピグミー」開催。

著書『熱帯諸国への完全旅行マニュアル』『東京路上細見記 多摩編』出版。

2000年 写真集『UJAMAA』出版。

2001年 大分県国東半島へ移住。「半農半写」の生活を目指し無農薬での米・野菜作りなどを行う。

この年から写真展「UJAMAA」開催。

2003年 写真展「草よ、大地よ、人間よ 牧畜民ハマル」開催。著書『世界の秘境の歩き方』出版。

2006年 NGOウジャマー・ジャパン設立。パキスタン北部大地震で孤児となった子どもの就学支援を続ける。

写真展「パキスタン大地震」開催。著書『循環と共生の森から 狩猟採集民ピグミーの知恵』出版。



ソレタッド・ナガタ・タカバンさん(右、1934年生まれ)とマリア・ナガタ・サイトウさん(左、1924年生まれ)の姉妹の父ナガタイナタロウは、ソレタッドさんが生まれてすぐに亡くなった。戦時中は母親の家族とイトゴンという集落に隠れて暮らしていた。家の近くでは日本兵が検問所をつくって駐留していたが、怖くて自分の父が日本人であることは誰にも話さなかった。バギオ(ベンゲット州)ルソン島 /2010

2008年 写真集『カミサマホトケサマ』出版。

2009年 この年から写真展「カミサマホトケサマ」開催。写真集『カミサマホトケサマ』で第9回さがみはら写真新人奨励賞受賞。第18回林忠彦賞最終候補。

2011年 周南市美術展写真部門審査員。(～2012年)

2014年 著書『世界のともだち14 南アフリカ共和国』出版。

2015年 写真集『フィリピン残留日本人』出版。

「アエラ」「週刊金曜日」「季刊民族学」「月刊アフリカ」「アジア研ワールド・トレンド」など多数の雑誌や新聞にルポを掲載している。

<http://www.funaoosamu.com/>

<https://www.facebook.com/osamu.funao.photography/>

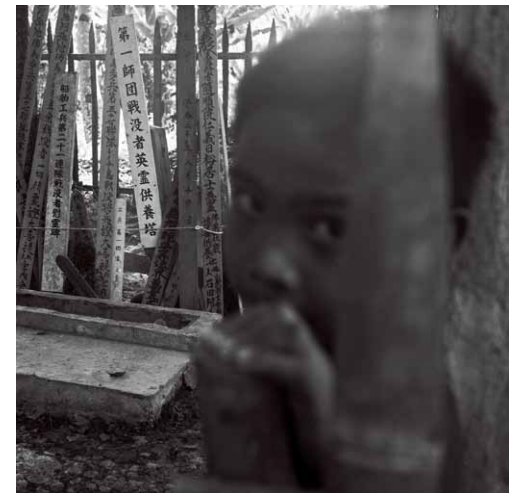
<https://twitter.com/funaoosamu>



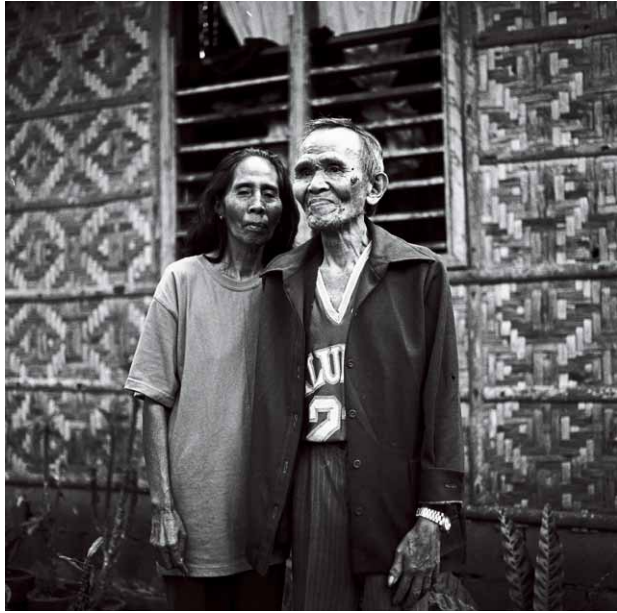
日本人移民の河田浅一は開戦直前、家族をギマラス島に残して日本へ帰国した。戦前、浅一はバナイ島のイロイロ市内にあるリアルバザールというところで商売をしていた。その後、日本で徴兵されて中国へ渡る直前に、妻のサビニアーナさんに軍服姿の自分の写真を送ってきたという。
フエナヴィスタ(ギマラス州)ギマラス島 /2012



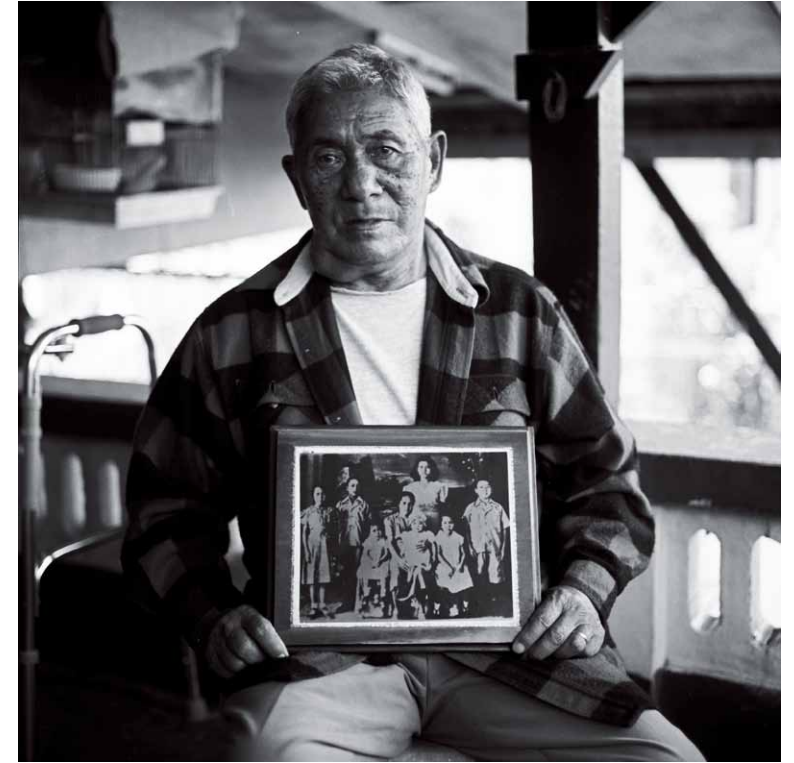
1912年生まれのウルボナ・ニドゥアガ・ガリさんの取材時の年齢は98歳(2010年)。福岡県出身の移民1世カワハラ・カツフサとはバギオ市内の商店で出逢い結婚。戦時中に日本軍に徴用されて通訳をしていた夫についてピガンの街で暮らしたが、夫とは生き別れになった。ふたりの子どももピガン滞在中に病気で相次いで亡くし、極貧の中で戦後を生き延びてきた。
トゥバオ(ラウニオン州)ルソン島 /2010



レイテ島の激戦地ブガブガ・ヒルで亡くなった戦没者を慰霊するための碑が、その丘を望む場所に戦後遺族らによって建立されていた。現地住民の敷地内にあり、管理人によると今でもときどき遺族らが参拝にやってくるが年々その数は減っているという。
ヴィラバ(レイテ州)レイテ島 /2010



2世のアブラハム(ヨシオ)・カイヌマイッタンさんはp.13 上のマサコさんの弟。1943年生まれなので父のことも戦争のこともまったく記憶にはない。戦後は食べるためにフィリピン軍に勤務し、現在は細々と農業をしているが、病気がちで障害のある娘も抱えているため暮らしは楽ではない。
マラコス(コタ(ト州)ミンダナオ島 /2009



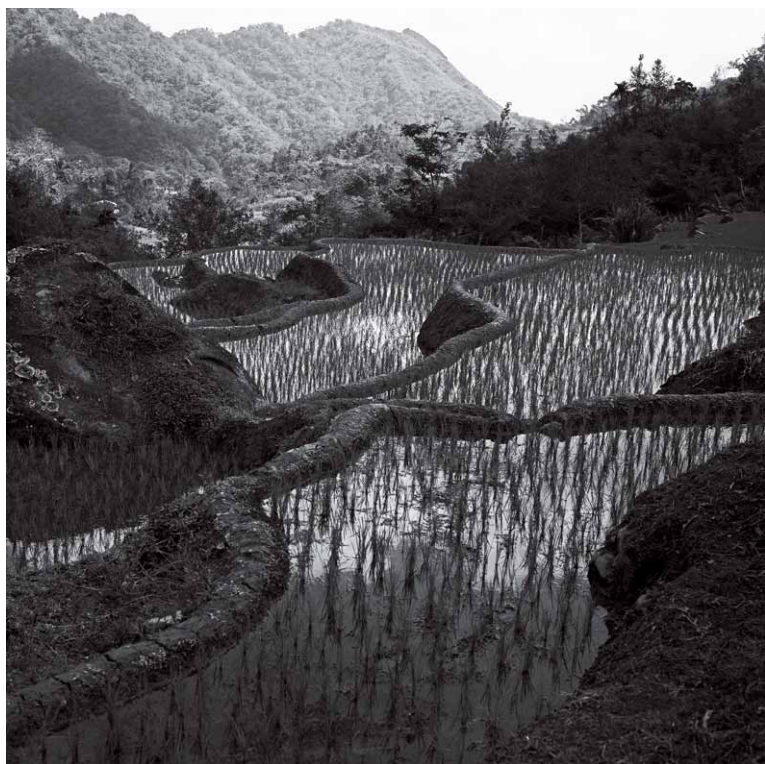
長岡理三さんを父に持つ2世の良男さんは山中での逃避行の際、両親と乳飲み子を含む妹5人を相次いで亡くした。埋葬もできず遺体をそのままにして逃げたのが一生の悔いという。戦後は日本人に対する迫害から身を守るためにダビッド・ジャーニーという母方のフィリピン名に名前を変えて生き延びた。
バギオ(ベンゲット州)ルソン島 /2010



1941年生まれの2世サテ・カワダ・ガリオさんが生まれまもなく、広島県出身の父、河田浅一は日本へ帰国した。理由はわからないが、異国で戦争が始まれば危険だと考えたのだろうか。その後のPNLSCIによる調査で、戦時中に父はいったん帰国したが、再び徴兵され、中国出征後に死亡したことが明らかになった。戸籍にはサテさんの名前の記載はなかった。
プエナヴィスタ(ギマラス州)ギマラス島 /2012



福岡県出身の移民である長岡理三さん一家はキアンガンで暮らしていたが、戦争末期、ルソン島北部の山岳地帯へ向かって敗走する日本軍と共に逃避行を続けた。その結果、息子の2世・良男さんを除いて全員が逃避行の途中で死亡した。バギオの共同墓地の牌にはただ1945年死亡という事実のみが刻まれている。
バギオ(ベンゲット州)ルソン島 /2010



高血圧で寝たきりのエメテリア・ファビアン・ゴンザレスさんは戦前の1934年生まれであるが、残留日本人2世ではなく3世である。祖父は大工をしていた神奈川県出身の加藤関蔵でバギオ大聖堂の建設にも携わったという。エメテリアさんの叔父は戦後になってから、日本人の子孫だという理由で殺害された。
ラトリニダッド(ベンゲット州)ルソン島 /2010

左ページ上

ルソン島北部の世界遺産にも登録されている美しい棚田群。しかし終戦間近には、敗走した日本軍や残留日本人らが追い詰められ多数の餓死者が出た。このあたりの住民は戦時中に兵隊が死んだ仲間の肉を口にするのを目撃しており、私も取材中にその話を何度か聞かされた。

ハバオ(イフガオ州)ルソン島 /2010

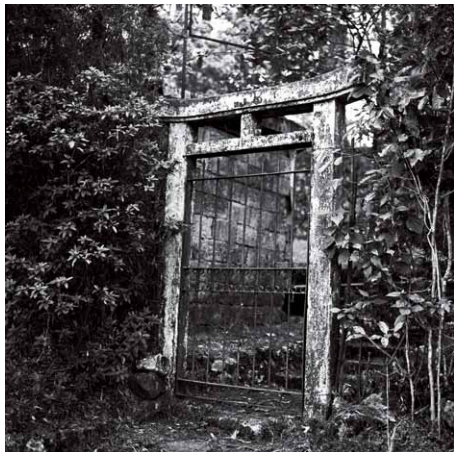
左ページ下

レイテ島の州都タクロパンの南、パロという小さな街の海岸に、「アイ・シャル・リターン」の言葉どおりダグラス・マッカーサーらは再上陸した。1944年10月20日のことである。海岸にはそれを記念する銅像が立っている。

パロ(レイテ州)レイテ島 /2010



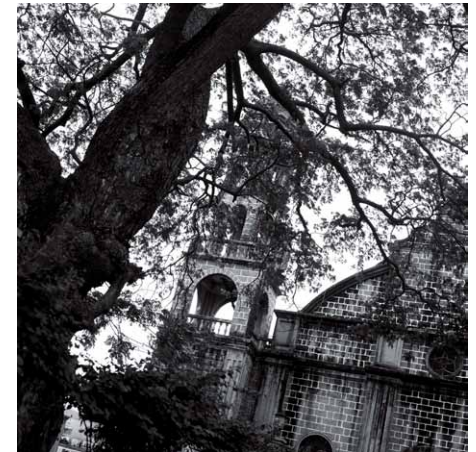
1918年生まれの2世メルシア・ヨシカワ・セグワボンさんは少数民族イゴロットの伝統的な衣装をいつも身につけている。戦時中は家族で山の中に隠れ、サツマイモを密かに育てて飢えをした。父は長崎県出身のヨシカワ・マサタロウ。
サガダ(マウンテン州)ルソン島 /2009



戦時中に日本軍によって一時期占領されたバギオの米軍施設キャンプ・ジョンヘイ近くに取り残された鳥居。おそらく日本軍を守護する目的で建立されたと思われるが、確かなことはわからない。
バギオ(ベンゲット州)ルソン島 /2010



1936年生まれ2世ゲルマン・オオウチ・ベルンさんはこれまで一度も日本語を使ったことがない。福島県出身の父オオウチ・イクオは家の中でも日本語は話さなかったからだ。そのせいかあまり日本人だという自覚はない。戦後は反日感情がすさまじく、日本人であることがバレたら命の保証はなかったので、自分の祖先は中国人だと偽って暮らしていた。
ナガ(南カマリネ州)ルソン島 /2014



マニラの南、ラグナ地方も日本軍による住民虐殺の舞台となったところである。カランバのカトリック教会にいったん集められた住民はゲリラの疑いをかけられ、有無を言わずに次々とどこかへ移送されたのち処刑された。正確な数は不明だがその数は約7000人と推定されている。同様の虐殺は周辺各地でも頻発した。
カランバ(ラグナ州)ルソン島 /2014



1933年生まれのアンヘリーナ(マサコ)・カイヌマイッタンさんは戦争末期、敗走する日本軍と一緒に弟を背負ってアボ山麓の小さな集落に身を潜めた。そのとき身重の母が産気づき、自分が竹の1片をナイフ代わりにして臍の緒を切った。山口県出身の父カイヌマ・ユウスケは米軍の捕虜となり生き別れとなった。
マラゴス(コタバト州)ミンダナオ島 /2009



1944年になってレイテ島に再上陸した米軍は次々と各地で日本軍を撃破していった。フガフガヒルでは最後の抵抗をして闘う日本軍が玉砕。戦後しばらくは現地住民もその現場付近には怖くて近寄らなかったが、周辺の洞窟からは最近になって人骨や銃器などが発掘され続けている。
ヴィラバ(レイテ州)レイテ島 /2010



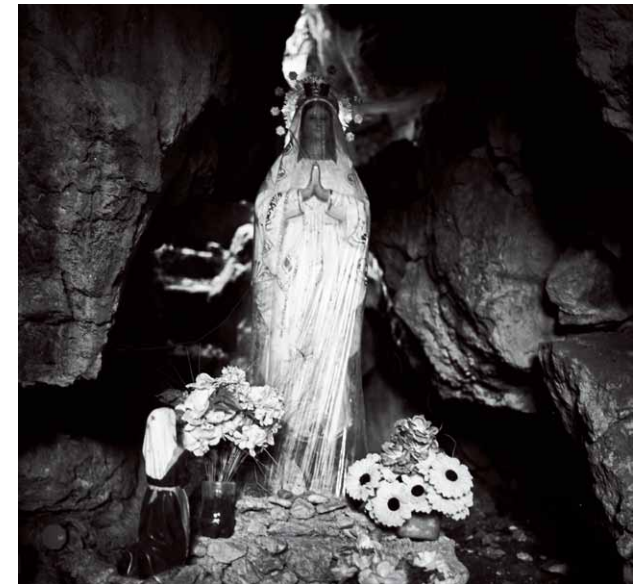
1週間前に亡くなった母クララ・アコップさんの葬儀のために集まった残留日本人2世の面々。クララさんは前夫ハクナカ・オトゴロウとの間に3人の子どもを、後夫フルカワ・フサオとの間に5人の子どもをもうけた。シスター海野から日本人であることの自覚を学んだと、残留2世たちは口をそろえる。
ラトリニダッド(ベンゲット州)ルソン島 /2010



2世のテレスタ・ムラカミ・ガセファさんは1931年生まれ。10歳のときに広島出身の父ムラカミ・コマイチはフィリピン人武装勢力に襲われ市場内で射殺された。大工だった父は町のカトリック教会の建造に携わったという。反日感情が渦巻く戦後、自分が迫害を受けることがなかったのは、街の人たちが教会建設の功で父にたいへん感謝していたからだとテレスタさんは信じている。
トゥバオ(ラウニオン州)ルソン島 /2010



戦争記念博物館に展示されているジオラマには、再上陸した米軍を日本軍圧政からの解放者として歓迎するフィリピン市民の姿が描かれている。真の独立を標榜するフィリピン人ゲリラは米軍と一体化して日本軍と戦っていた。しかしその一方で、アメリカこそが侵略者であると考えて日本軍の側についた市民も多数存在した。
リンガエン(バンガシナン州)ルソン島 /2014



ルソン島中央部にあるバレテ峠は戦争末期、攻め入る米比軍と北上を阻止したい日本軍との間で激戦となった地で、日本軍はほぼ壊滅状態となった。峠を下った集落の一角に大きな洞窟があり、日本兵はここに籠って応戦したが全滅したという。「奥から気味悪い声が聞こえるのです」と村人は今でもこの洞窟を怖れている。
バレテ峠(ヌエヴァ・ヴィスカヤ州)ルソン島 /2014

「近世店屋考」(写真展) <small>きんせいみせ や こう</small>	池本喜巳 <small>(いけもと・よしみ)</small>
「一山」(写真集・写真展・雑誌) <small>いっさん</small>	古賀絵里子 <small>(こが・えりこ)</small>
「New Type」(写真集)	清水哲朗 <small>(しみず・てつろう)</small>
「草葉の陰で眠る獣」(写真集・写真展・雑誌) <small>くさば かげねむる しし</small>	百々武 <small>(どど・たけし)</small>
「オキナワンブルー 抗う海と集魂の唄」(写真集) <small>あらが うみ しゅうこん うた</small>	豊里友行 <small>(とよざと・ともゆき)</small>
「フィリピン残留日本人」(写真集) <small>ざんりゅうにほんじん</small>	船尾修 <small>(ふなお・おさむ)</small>
「TRUK LAGOON トラック諸島 閉じ込められた記憶」(写真集・写真展) <small>しよとう と こ きおく</small>	古見きゆう <small>(ふるみ・きゆう)</small>
「老農 北上高地の生 40年の記録」(写真集) <small>ろうのう きたかみこうち せい ねん きろく</small>	堀忠三 <small>(ほり・ちゅうぞう)</small>
「雲隠れ温泉行」(写真集・写真展) <small>くもかく おんせんゆき</small>	村上仁一 <small>(むらかみ・まさかず)</small> <small>(敬称略・五十音順)</small>

今年もまた林忠彦賞の審査が無事終了しました。毎年のことながら全体の作品レベルは非常に高く、毎年私はいつも期待をもって参加しております。同時にいつも期待を裏切らない形でいろいろな作品が集まります。

周南市がされる林忠彦賞の場合特徴的なことは、自分で写真集をお出しになっているケースが多いことです。これはやはり林忠彦先生という天才的な写真家、写真ジャーナリストと言っても良いかもしれない、つまりジャーナリスティックな観点から写真を撮る、世相を切り取る、あるいは人物を切り取る、というような観点から作る林先生の写真との血の繋がりを感じるとでもいうべきですか、林先生の弟子、その弟子の弟子…というような形で写真が作られている、そういう伝統的な厚みというものがあると感じます。ただ写真が好きだから、上手だからというだけで写真は生まれるものではありません。やはり作品に重みというものを感知させる、そういう作品が多く寄せられていると思います。

こうしたものは非常に重要な現代の文化的財産ですから、周南市がこの文化的財産といえる受賞作品を収蔵し、美術博物館の重要なコレクションの中に入れておくということは、ものすごく意味をもって来るんですね。写真というものは、これから10年後、50年後、あるいは100年後、年を重ねれば重ねるほど、古くなればなるほどその意味が重くなる、そういう特質を持っています。現代の日本の状況とか世相、そういうものは年を積み重ねれば重ねるほど歴史性、記録性という大きな価値がありますので、その時代の写真の意味と価値が大きく膨れ上がるんですね。

例えば50年後100年後に、自分の生まれ育った周南市が昔はこうであったという、単純にその時代の世相を見せるのではなく、その時の写真家の表現力といったようなものを見ることが出来る。それは周南市に生まれた市民にとっても非常に誇らしい事実として残るわけです。ですから今日の写真を撮りきるということは、将来、未来にわたって力を繋げていくという意味合いを持つわけです。どうぞ大いに写真を活用して、将来の周南市民の人たちへ、もちろんそれを超えて日本全国、あるいは世界へとというふうな形で引き継いでいってほしいと思います。私は長年、周南市の林忠彦賞の選考委員をさせていただいて、今までの作品の中からそれを十分に感じ取ることができました。これもやはり林忠彦さんという優れた写真家を生み育てた、そういう土壌がここにはっきりと表れているというふうに思います。

今回の林忠彦賞は船尾修さんの「フィリピン残留日本人」が受賞しました。戦争が終わってももう70年です。70年あるいは80年前、フィリピンは太平洋戦争の中心地のような大変な場所でした。しかし戦前からそこに移住しその土地にいついて、フィリピンの女性と結婚して子どもが生まれて、といった方々がかなりいたんですね。けれど戦後、その子どもたちはフィリピンの国民として、日本人が父親であるということをはっきりと表に出すことができない人もいたでしょう。そういうことを胸にしまいながら大きくなり、結婚して子どもが生まれる。そうやって代々繋がってゆく家系の中に、日本人の血が混じっているという方々が結構いらっしゃる。そして「フィリピン残留日本人」という、そのものズバリのタイトルの素晴らしい写真集をお作りになった船尾修さんが今年の林忠彦賞に選ばれたわけです。

いずれは自分も写真集を出したいと願っている方はたくさんおります。写真好きだから写真を撮る、それはいいんです。おじいちゃんが孫の写真を撮るのは当たり前、それは撮ってあげたらいいんです。そしておじいちゃんが写真集を作るということも十分可能なわけです。けれど写真は芸術の一つ、特に現代芸術の中の重要なポジションを得ているので、どうぞ自分の写真術の腕前を上げてください。そのためにはまず勉強することです。それは人の写真集を見るということです。もちろんプロフェッショナルな素晴らしい写真家の写真・写真集から学ぶことも多いですが、アマチュアでありながら自分の作品集を出しているという方もたくさんいらっしゃいますので、こうした良いお手本をぜひ使っていただきたい。そして写真集を作る目的で写真を撮り、学び、応募する。目標を超えたらさらに次の写真集を作る、さらにまた作る、そして自分の作品が生まれる、というようなこともありますので、ぜひ写真集を目標にやってください。そして写真集を目標にするけれども、コンテストというものも人の目に触れ、批評されるでしょう。そういう機会をたくさん持つことによって、自分の作品を鍛え上げていく、腕を磨くことができるわけですから、まず写真集を作るということを目指し、そしてコンテストに入選する。両方を目標にし、さらにそれをどんどん積み重ねていって、ぜひぜひ写真を通して文化の深いところに足を踏み入れていただきたいと思います。

池本喜巳さんの「近世店屋考」。この写真は非常に日本的です。写真のレベルも物凄く高いんですけど、写っている人はこの地方の人物、この町の人とかで、そうすると写真にもう一つの意味が出てくるわけです。単純に東京へ行って写真を撮ったというのとはわけが違いますから物凄い価値があります。ローカルな意味での価値なんですね。この写真を日本の他へ持っていっても、あーそうか、人物写真か、で終わってしまいます。写されている人が誰かということで価値の種類の写真なんです。50年後にどれだけの意味を持つか。ですからこの方は本当の意味でのいわゆる社会的な写真家ですね。

委員 大石 芳野

船尾修さんの写真集「フィリピン残留日本人」は、戦後70年に相応しい作品だと思いました。これはタイトルのとおり、フィリピンに残された日本人です。中国の残留日本人は知られていますが、フィリピンにも大勢の日本人がいて、そこでその子どもたちが生まれた、あるいは置き去りにされた、これまでも漏れ伝わっていました。知識としてはありましたが、歴史的事実として船尾さんがしっかりとひとりひとりと向き合って記録されたので私たちもその実態を知るに至りました。ここに写っている人たちは70年間もの長い間、日本人であることを隠しました。戦争中の日本軍に対する黒いイメージが残っているために、日本人の子どもだというだけでいじめられ、そこでは暮らせなかった実態もあったからです。船尾さんは7年間も通ってそうした体験をきちんと捉えながら写真で表現しました。モノクロームの確かな写真表現で、林忠彦賞に相応しいと思います。林忠彦先生も表現にとてもこだわっておられました

ので、そういう意味でも相応しい作品に巡り合えたと思います。

それから次点になった清水哲朗さんの「New Type」は、モンゴルの人たちを撮ったものです。長い間モンゴルの人たちを撮りながら、時代の変化の中で昔ながらのあるいは伝統的な暮らしを少しずつ変えて近代化的な、…まあその呼び方は変ですね、現代とか近代とかおかしいですが、…手作りの暮らしから、機械化された暮らしになりつつあるということでしょうか。1年間の中で氷と雪に覆われた季節が長いことを、例えば氷で作ったすべり台などで遊ぶ子どもの写真などを通しても知ることができます。全体を解説する必要は無いのですが、キャプションとか解説文が無いので、何の写真かと気にもなりました。感じてくれればいい…という類の写真ではないので、文章があればもっと伝わりやすかったと思います。まだお若いですからこれから先、大いに頑張ってください。

堀忠三さん「老農 北上高地の生 40年の記録」という写真集は、北上高地で生きる人たちの40年の記録です。“老”というタイトルどおり、お年を召した農民たちですが、結局こういう人たちの農業によって私たち都会の人間が支えられていることがよくわかります。無論、北上高地だけではなく、日本中に繋がるこういった“農”で生きる人たちの遅しさと、土と共に生きる人々の遅しさというのがよく捉えられています。自然と共に生きたという人たちの人間を包み込むような表情も魅力的です。堀さんはそうした人々に好かれながらこの写真を撮ったということが分かります。

それから最終候補にノミネートはされませんでした。絵門仁さんの室生寺の写真。展覧会と同じ写真をオリジナルプリントで応募されました。モノクロームは銀塩プリントですが、ご自分で焼いたようにいぶし銀の深みのある、実に個性的な表現になっています。カラーは現像所がプリントしたのですが、モノクロームとは対照的な鮮やかな色彩で、両者のコントラストが魅力的で、芸術的な写真に仕上がっていると思いました。

絵門仁さんだけでなく、その他にもノミネートできなかった良い作品がたくさんありました。私も写真家として皆さんから教えられ、考えさせられながらの審査でした。ありがとうございました

委員 笠原 美智子

今回はドキュメンタリーの力作が最終候補に残りました。中堅作家と言ってもいいと思うし、もうベテランの域に入っていると言ってもいいと思うんですが、船尾さんの作品「フィリピン残留日本人」は、最初のページを開いてから最後まで緊張感で私は本当に手が震えました。私たち日本人にとって戦争はかなり遠くの出来事のように感じますけれども、確実に今、世界各地で戦争が継続し、私たちは当事者なんだということを現実的に真に迫る形で教えてくれる力作だと思います。

それからもうひとつの戦争関連の作品、古見きゆうさんの「TRUK LAGOON トラック諸島 閉じ込められた記憶」、やはり第二次世界大戦の日本、それから世界の状態を海の底に見た、それも9年間ずっ

と撮影をして写真集にまとめられた作品です。これも力作だと思います。チューク諸島で70年という時間、海に沈んでいた戦争の遺産です。世界はその間、様々に変わりましたが、争いと人間の醜さとか、そういったことについて何にも変わっていないということを示している作品だと思います。言っていることが矛盾するようですけれども、海の底のものたちは形が変わっています。月日がここに堆積、積み込まれているのではないかと、月日を写しているのではないかと思います。あとこの写真集が面白いのは、やはり南の島なのでとても楽しげな写真もたくさん加わっていて、こんな楽しげなところで残酷なことをしていたということが思い起こされます。文化的に豊かな中東が踏み荒らされて、陽気な人たちが死んでいくという今の現状まで想像力を及ぼすような作品だと思います。

それからとてもニュアンスのある題名を付けられた、「草葉の陰で眠る獣」という百々武さんの作品もとても楽しげな作品です。百々さんはご自身が生まれた奈良県をずっと撮っています。日本とそれから自分自身の故郷を四つに渡り合っている作品なのではないでしょうか。

あと、最終候補の選にはもれましたけれど、女性作家の活躍も印象的でした。真月洋子さんの「floating sign」、とても力作です。それから馬場さおりさんの「2.7% ~若年性乳ガンを発症した私~」というセルフポートレートも、できれば本当に選に入って欲しかった作家さんでした。

委員 河野和典

今年も100点以上の多種多様な作品が集まりましたが、中ではドキュメンタリー作品に秀作がひしめき合う形となりました。その頂点に輝いたのが船尾修さんの写真集『フィリピン残留日本人』でした。戦後70年を迎えた2015年、広島、長崎をはじめ多くの戦争の悲惨さを捉えたドキュメンタリー作品が見られましたが、この作品は戦後70年が経過した今だから成し得たとも言えるとてもインパクトの強い作品でした。非常に地に足が着いた取材をされていて、6×6判モノクロームによるコントラストが強く歯切れの良い精密な描写は、言葉では言い尽くせないフィリピン残留日本人（日系2世）が置かれた過酷な状況を、その表情、たたずまいに滲ませ、見る者に迫ってきます。第一級のドキュメンタリー作品と言える見事な出来栄です。

惜しくも次点だったのが、清水哲朗さんの写真集『New Type』です。清水さんはずっとモンゴルを撮りつづけていますが、ここでは若者を通して新しいモンゴルの現状をさすがしく伝えていています。これまたモノクロームでフットワークの良い、軽妙洒脱な表現が秀逸です。

それからもうひとつ気になったドキュメンタリーが、豊里友行さんの写真集『オキナワブルー 抗う海と集魂の唄』です。戦後70年と切っても切れないのが「沖縄」ですが、今年の応募には「沖縄」作品が写真集、写真展ともにたくさんありました。その中で豊里さんは40歳になるかならないかの若い人ですが、その若々しく生き生きとしたインパクトの強い描写に非常に好感を持ちました。まさに沖縄

の今を伝える写真だと思います。

最終候補から漏れた中でも、山下恒夫さんの「続 島想い」とか、鷲尾倫夫さんの「巡歴の道 オキナワⅡ」とか、「沖縄」に関する味わい深い作品がありましたけれど、こういう方たちはおそらくこれからも続けて沖縄を撮られると思いますので、今後に期待したいと思います。

それから古賀絵里子さんの「一山」。「一山」と書いて“いっさん”と言うんですね。これは高野山を撮られた作品ですけれど、非常に多角的にしかも斬新に捉えていて、単にお寺を撮られたものではなくて、彼女の心に残った山道であったり、落ち葉であったり、子どもであったり、犬であったり、お坊さんであったりするわけですけれど、最終候補に残った9作品の中では写真の切れ味、色の美しさとも際立っていて、その映像美は出色でした。

委員 有田順一

林忠彦賞がスタートして25回。ちょうど四半世紀が過ぎたところです。

この間、わが国にとって忘れることのできない第二次世界大戦の大きなくくりが50年、60年、70年とありました。今回がその戦後70年でした。

やはり報道、ドキュメンタリー系の写真家は、この節目をたえず意識して仕事をされていたのではないのでしょうか。その中で見逃せないのが、平等には進まない戦後処理の問題。とくに軍隊を派遣、占拠、駐屯、占領した国々での問題は、分野によってはまったく進んでないというのが現状です。いや、一部はすでに葬り去られてしまっているといったほうがいいのかも分かりません。

さて、審査は順調に進み、最終候補が出そろった時、戦後70年に思いをはせた作品が数点残っていました。そして、最終投票の結果、大賞は「フィリピン残留日本人」に決定しました。

フィリピンという国、考えてみれば近いようで遠い。たとえば、この国の成り立ちがきちんといえる日本人がどのくらいいるのでしょうか。極めつけは、先の大戦で日米が激突し、フィリピンの方に100万人以上もの犠牲者が出たこと。一体どれくらいの人を知っているのでしょうか。

そのフィリピンの戦後問題のひとつで、ほとんど手つかずに近い「フィリピン残留日本人」に切り込んだのが、大分県在住の船尾修さんです。

2008年、ルソン島の棚田の取材中、現地の方から、はじめて残留日本人のことを聞き、この事実を残し世に出すには今しかないと思われたそうです。目的は、残留者たちの日本国籍を回復させてあげたい。2009年から2014年まで、7回にわたり取材活動を続け、2015年、戦後70年にあわせて写真集として発表されたものです。また、写真集発刊のためクラウドファンディングにより資金を募られた苦労作でもあります。中型カメラ(6×6)、モノクロームフィルムによる撮影で、残留日本人約60人の方々ひとりひとりと向き合った迫真のドキュメンタリーとなっています。今回の受賞でこの作品が多くの方々目にとまり、残

留日本人の問題が少しでも早く解決するよう願っております。

その他、最終候補作品からは、モンゴルの民主化以降の都市の変化を綴った清水哲朗さんの「New Type」。高野山の聖域とその日常と自分との関係性を開創1200年に発表した古賀絵里子さんの「一山」。粒子の粗い画面に誰もがもつ温泉特有の空気感というか風情を写した村上仁一さんの「雲隠れ温泉行」など、いずれも年季の入った作品で見ごたえがありました。

応募数108点からみた傾向は、ドキュメンタリーからアート、現代美術まで平年並みでしたが、最終候補には、久方ぶりにドキュメンタリー系が並びました。また、すでに林賞の特色といってもいい女性写真家、表現者の作品も例年にも増して好調でした。選には漏れましたが、フジモリメグミさんの「hera」、柴田麻希さんの「per se」などが印象に残りました。

林忠彦賞は時代とともに歩む賞です。合言葉は「社会は心を撃つ写真をさがしています」。

次回こそ、あなたの感性で「今の時代」を解き明かしてください。

これらの講評は、選考直後のインタビューに、後日各選考委員により加筆、修正を加えたものです。



選考委員会風景

日本写真協会賞

公益社団法人日本写真協会は、写真を通じて国際親善の推進と文化の発展に寄与することを目的として、1952年（昭和27）に設立された日本で最も権威のある写真団体です。

「日本写真協会賞」は、日本写真協会が、日本の写真界や写真文化に顕著な貢献をした個人や団体に対して贈る賞で、国際賞、功労賞、文化振興賞、年度賞、作家賞、学芸賞、新人賞の各賞があります。

林忠彦賞は、地域における写真文化の振興に顕著な貢献をしたとして、1996年（平成8）「文化振興賞」を受賞しました。



文化振興賞で授与されたブロンズ像
松永 真「メタルフリース」

大石 芳野 (おおいし・よしの)

東京都生まれ。日本写真家協会、日本民族学会、日本ペンクラブ会員。日本大学客員教授。日本大学芸術学部写真学科卒業後フリーの写真家となる。戦争や内乱後の人々の姿に視点を向けたドキュメンタリー作品を手がけ、アジア、アフリカ、ヨーロッパなどで取材を行う。

受賞—1982年(昭和57)日本写真協会年度賞。1990年(平成2)講談社出版文化賞、アジア・アフリカ賞、1994年(平成6)芸術選奨文部大臣新人賞。2001年(平成13)『ベトナム凜と』で第20回土門拳賞。2007年(平成19)紫綬褒章。2014年(平成26)『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』でJCJ賞(日本ジャーナリスト会議)他。写真集—2005年(平成17)『子ども 戦世のなかで』(藤原書店)。2011年(平成23)『それでも笑みを』(清流出版)。2013年(平成25)『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』(藤原書店)。2015年(平成27)『戦争は終わっても終わらない』(藤原書店)他。

笠原 美智子 (かさはら・みちこ)

1957年(昭和32)長野県生まれ。明治学院大学社会学部卒業。シカゴ・ロンビア大学大学院修了。1989年(平成元)から東京都写真美術館学芸員。現在、同館事業企画課長。著書に『写真、時代に抗するもの』『ヌードのポリティクス』など。主な展覧会企画に、1996年(平成8)『ジェンダー、記憶の淵から』展、1998年(平成10)『ラヴズ・ボディ―ヌード写真の近現代』展、2001年(平成13)『手探りのキス、日本の現代写真』展、2008年(平成20)『オン・ユア・ボディ 日本の新進作家』展、2010年(平成22)『ラヴズ・ボディ―生と性を巡る表現』展、2012年(平成24)『日本の新進作家vol.11 この世界とわたしのどこか』展等。2005年第51回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナーとして『石内都 マザーズ 2000-2005』展を企画。

河野 和典 (こうの・かずのり)

1947年(昭和22)鳥取県生まれ。1970年(昭和45)(株)日本カメラ社入社。月刊『日本カメラ』編集の傍ら、『名機を訪ねて』(那和秀峻著)、『レンズ汎神論』(飯田鉄著)、『目からウロコ』(杉浦康平、若桑みどり、筑紫哲也、上野千鶴子、森村泰昌、池澤夏樹、石川好、竹村和子、中沢新一、小森陽一共著)などの単行本や別冊『ボラロイドの世界』を手がける。1999年(平成11)から2004年(平成16)まで月刊『日本カメラ』編集長。2008年(平成20)8月独立、写真プロダクション(株)スタジオレイを設立。2009年(平成21)中里和人写真集『ULTRA』を制作・出版、2010年(平成22)写真集『新山清の世界vol.2-ソルントン時代』(COSMOSインターナショナル刊)、2012年(平成24)には由良環写真集『TOPOPHILIA』(COSMOSインターナショナル刊)、有野永霧写真集『日本人景 温泉川』(平凡社刊)を編集。2013年(平成25)から公益社団法人日本写真協会が制作・発行する『日本写真年鑑』に出版広報委員、理事として携わる。日本カメラ社編集顧問。

細江 英公 (ほそえ・えいこう)

1933年(昭和8)山形県生まれ。1954年(昭和29)東京写真短期大学(現・東京工芸大学)写真技術科卒業。1956年(昭和31)の第1回個展『東京のアメリカ娘』以来、海外、国内で写真展を多数開催。作品集に『おとこと女』『薔薇刑』『鎌鼬』『ルナロッサ』など多数。1970年(昭和45)芸術選奨文部大臣賞、1998年(平成10)紫綬褒章、2003年(平成15)英国王立写真協会創立150年記念特別賞、2007年(平成19)旭日小綬章、2008年(平成20)毎日芸術賞受賞。2010年(平成22)文化功労者。東京工芸大学名誉教授、1995年(平成7)より清里フォトアートミュージアム館長。

有田 順一 (ありた・じゅんいち)

1955年(昭和30)山口県周南市生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。1983年(昭和58)周南市文化振興財団勤務。1991年(平成3)林忠彦賞創設から事務局兼務。2010年(平成22)周南市美術博物館館長。林忠彦、秋山庄太郎、緑川洋一、細江英公、立木義浩、星野道夫、岩台光昭等の展覧会を担当。その他、周南市出身の洋画家 宮崎進、詩人 まど・みちおの顕彰活動を推進する。

(敬称略・五十音順)

歴代選考委員

秋山 庄太郎 (あきやま・しょうたろう) 写真家

植田 正治 (うえだ・しょうじ) 写真家

大竹 省二 (おおたけ・しょうじ) 写真家

岡井 耀毅 (おかいてるお) 写真ジャーナリスト

齋藤 康一 (さいとう・こういち) 写真家

立木 義浩 (たつき・よしひろ) 写真家

田沼 武能 (たぬま・たけよし) 写真家

中村 正也 (なかむら・まさや) 写真家

奈良原 一高 (ならはら・いっこう) 写真家

緑川 洋一 (みどりかわ・よういち) 写真家

森川 紘一郎 (もりかわ・こういちろう) 元周南市美術博物館館長

渡部 雄吉 (わたべ・ゆうきち) 写真家 (敬称略・五十音順)

講評(抜粋)は第1回、2回、4回～11回は秋山庄太郎氏、3回、16回は岡井耀哉氏、12回は大竹省二氏、13回～15回は田沼武能氏、17回～21回、23、24回は細江英公氏、22回は大石芳野氏。



「カシュガル(喀什)」

第1回
「西域—シルクロード」(写真集) 後藤正治(ごとう・まさはる)

1946年(昭和21)東京都生まれ。祖父、父の影響で小学校から写真を始め、植田正治に師事した後、シルクロードをテーマに撮影を開始。1990年(平成2)九州産業大学大学院芸術研究科(写真専攻)に入学、1992年(平成4)修了。2001年(平成13)第25回全国高等学校総合文化祭写真部門審査委員長。写真展開催、写真集出版多数。静岡県函南町在住。

作品は非常に格調も高く、作家の写真に対する真摯な情熱と、その作品集の持つ説得力に、選考委員長として敬意を表したい。いずれにしても、絶賛に値する作品が第1回目の林忠彦賞に選ばれたということは誠に慶賀すべき出来事だと思います。

web http://www.dialand.co.jp/public_html/

blog <http://blog.goo.ne.jp/gotoh1031>



「山羊と少年
〈折々の詩〉」

第2回
「田園の微笑」(写真集) 捧武(ささげ・たけし)

1933年(昭和8)新潟県生まれ。1955年(昭和30)頃から田園の風俗を撮り始める。1958年(昭和33)新潟県アマチュア写真連盟発足、以後30年にわたり事務局担当。1964年(昭和39)新潟県展にて審査員の林忠彦から奨励賞受賞。以後、県展や新潟二科展で入選入賞を重ねるなど活躍した。2007年(平成19)新潟県写真芸術協会発足、初代会長に就任。2010年(平成22)死去。

30年もの歳月をかけ写真集を作り上げた捧さんの作品が選考委員の皆さんの支持を得たということは、生前、特に晩年に林さんがおっしゃっていた「写真は記録であることを痛感した」という言葉に照らし合わせても、非常に妥当であったと思います。



「黒田家(小笠町) 堀をめぐらせた代官屋敷」

第3回
「静岡の民家」(写真集) 木村仲久(きむら・なかひさ)

1938年(昭和13)静岡県生まれ、日本大学工学部土木工学科卒業後、静岡県庁勤務。全日本写真連盟、二科会で活躍した。地元を中心に写真集団影法師を主宰するなど、静岡県写真界の指導的立場を務めた。故郷をテーマに写真展開催、写真集出版多数。1999年(平成11)死去。

静岡県内に点在する重要な旧家の重厚なたたずまいを、風土に生き続けてきた暮らしとの関わり合いで見つめたもので、格調高いカメラアイは決して単なる建築写真的なアプローチではありません。懐郷の思念も端正な構成の中に見事に抑制されて、写真家の肉声が、失われていく「家」の中を通り過ぎていきます。



「村の子供達」

第3回
「たかちほ」(写真集) 田崎力(たさき・つとむ)

1920年(大正9)宮崎県生まれ。1941年(昭和16)九州医学専門学校(現久留米大学医学部)卒業。1951年(昭和26)頃からカメラ雑誌に応募し、土門拳に指導を受ける。二科会を中心に各コンテストで活躍。1996年(平成8)宮崎県文化賞(芸術部門)受賞。医学博士。2012年(平成24)死去。

長年にわたる氏の労作の総集編ともいうべきもので、神楽の里の高千穂へ注がれる眼の優しさが格別です。さりげない描写の中にも伝承の風土の哀愴が深々と生きています。記録の美しさを改めて感じさせました。



「元陸軍一等兵 重河博之
ウマル・サントス・シグカワ」

第4回
「帰らなかった日本兵」(著書) 長洋弘(ちよう・ようひろ)

1947年(昭和22)埼玉県生まれ。日本体育大学、武蔵野美術大学卒業。東京写真専門学校中退。1979年(昭和54)国際児童年記念写真展大賞受賞。1982年(昭和57)から85年(昭和60)までインドネシア・ジャカルタ日本人学校に勤務、ライフワークとなるインドネシア残留元日本兵の取材を開始する。1994年(平成6)「帰らなかった日本兵」、2007年(平成19)総集編となる「インドネシア残留元日本兵を訪ねて」刊行。他にも著書、写真展多数。埼玉県比企郡吉見町在住。

写真の力を十二分に発揮した作品といえるでしょう。一冊の本を書く作者の真摯な取材姿勢が強く伝わってきます。日本の戦後を考える上でも非常に貴重な写真的記録として評価でき、素材の力強さとしても文句のつけようがない作品でした。



「天城山 1994.10.8」

第5回
「追いつめられたブナ原生林の輝き」(写真集) 岡田満(おかだ・みつる)

1946年(昭和21)大阪府生まれ。大阪市立大学2部法学部卒業後、大阪府立生野高等専門学校に赴任、聴覚障害生徒の職業教育に携わる。大学3年の時に写真を始め、1990年(平成2)からブナに魅せられ各地の原生林を追い続ける。1995年(平成7)それらをまとめた「追いつめられたブナ原生林の輝き」刊行。その後も取材を続け現在に至る。写真展開催、写真集出版多数。大阪府大阪市在住。

とにかく、すべてにわたってしっかりしています。装丁もすばらしいし、撮影している題材も良いものです。ブナは被写体としても地味ですから、あまり扱われてきませんでしたし、なかなかこれだけうまくまとめられないと思います。

blog <http://okaman.jugem.jp/>



「チーターの子ども」

第6回
「サバンナが輝く瞬間」(写真集) 井上冬彦 (いのうえ・ふゆひこ)

1954年(昭和29)東京都生まれ。東京慈恵会医科大学卒業。1987年(昭和62)初めて東アフリカを訪れサバンナの自然と動物をテーマに写真活動を始める。1996年(平成8)写真集「サバンナが輝く瞬間」刊行。現在はクリニックを開業し、医師、写真家としての眼で「生命とは何か」という問いに向き合っている。医学博士。日本写真協会会員、サバンナクラブ顧問。神奈川県横浜市在住。

サバンナの大自然の中で逞しく生き抜く野生動物たちの姿を、慈愛に満ちた温かい視線で捉え優れた写真映像に結実させており、長年にわたる作者のその努力と取材姿勢を高く評価したいと思います。

<http://www.fuyuhiko.jp/>



「父さんの仕事場は最高の遊び場所」

第7回
「ぼくは、父さんのようになりたい」(写真展) 井上暖 (いのうえ・だん)

1943年(昭和18)東京都生まれ。日本大学文理学部心理学科卒業。映画のステール写真に魅せられて小学校の頃から写真を始める。1967年(昭和42)料理店経営を始める。1997年(平成9)写真展「ぼくは、父さんのようになりたい」開催。日本大学心理学科方寸会会員。東京都八王子市在住。

この作品は、自然光を生かした大判カメラによるガッシリした撮影で、その場の雰囲気と生活感を十分に取り入れ深みのある写真に仕上げられています。貧しいながらも家族の仕事に誇りを持って働く子どもたちの姿を、写真の基本ともいえる方法で取材した姿勢になにより好感が持てます。



「丙中洛(ピンツンロ)」

第8回
「天空の民」(写真集) 清水公代 (しみず・きみよ)

長野県生まれ。長野県立松本嶺ヶ崎高校卒業。46歳の時写真を始める。写真家小久保善吉に師事。写真活動を通して中国大陸に魅せられ、撮影テーマを主として中国少数民族の生活と文化に定める。1993年(平成5)まで取材活動を続け、1998年(平成10)写真集「天空の民」刊行。現在もアジアにおける少数民族の生活文化をテーマに取り組んでいる。日本写真家協会会員、日本写真協会会員、全日本写真連盟関東本部委員。東京都青梅市在住。

今回の受賞作については、アマチュアでありながらよくこれだけの作品ができたものだと感じました。これからも、作品作りに励んでいただきたい。



「鳥取県北条町下北条 1993年」

第9回
「Personal View [視線の範囲]」(写真集) 渡里彰造 (わたり・しょうぞう)

1935年(昭和10)鳥取県生まれ。鳥取県立米子南高校卒業。長男誕生を機に成長を記録するため写真を始める。植田正治に師事。山陰写真作家集団に参加、ニッコールコンテスト、二科会写真部展で入選賞多数。日本写真協会会員、二科会写真部会員、二科会写真部鳥取県支部支部長、鳥取県写真連盟会長、鳥取県美術展運営委員。2012年(平成24)死去。

山陰地方の日常的な光景の中から、独特の鋭い感覚とユーモラスな視点で切り取られたモノクロスナップです。自分の視点をきちんと定めてコツコツと撮り続けていけば、身の回りのものでも立派な写真になり、大きな成果に結びつくという良いお手本になったのではないのでしょうか。



「大鹿歌舞伎」

第10回
「塩の道 秋葉街道」(写真集・写真展) 竹林喜由 (たけばやし・きよし)

1943年(昭和18)愛知県生まれ。静岡県立商業高校卒業。1972年(昭和47)から本格的に写真を始め、翌年写真集団影法師に入会(現在退会)。月例コンテストなどで多数賞し頭角を現す。各所の写真講座講師を務め後進の指導にあたる。日本写真協会会員、全日本写真連盟関東本部委員、静岡ライカ倶楽部会長、静岡白黒写真同好会会長。静岡県藤枝市在住。

塩の道という歴史的な街道を丹念に取材した力作で、一つの大きなテーマに作者が精魂込めて取り組んだという情熱がストレートに伝わってくる作品です。晩年に「東海道」を上梓した林忠彦さんの業績を記念する賞に、内容的にも誠にふさわしい受賞作といって良いでしょう。

<https://www.facebook.com/kiyoshi.takebayashi.3>



「N列車 1999」

第11回
「ニューヨーク地下鉄ストーリー」(写真展) 角田和夫 (すみだ・かずお)

1952年(昭和27)高知県生まれ。高知県立高知工業高校卒業。大阪写真専門学校卒業。1988年(昭和63)「満月の夜」開催以降、写真展多数開催。1996年からは父の残した手記をもとにシベリア抑留の取材を始める。1999年(平成11)文化庁派遣芸術家在外研修でニューヨークのICP(国際写真センター)で研修を受ける。2006年(平成18)宮崎進&角田和夫2人展「シベリアから平和を考える」開催(高知県香美市立美術館)。日本写真作家協会会員。高知県南国市在住。

今回の作品はニューヨークの地下鉄を取材したもので、実に丹念に撮影しているなど感じました。地下鉄に行き交う人々の人間模様を、鋭いカメラアイでしっかりと切り取っています。一つのテーマに打ち込んで、見る者を退屈させないほどのバラエティーの豊かさも持っています。

<http://www.kazuosumida.com/>



第 12 回
「静かな時への誘惑」(写真展) 石川博雄 (いしかわ・ひろお)

1951年(昭和26)愛知県生まれ。1996年(平成8)「アサヒカメラ」4月号に「風の気持ち」発表。1999年(平成11)写真展「木花物語・あなたと暮らした街」開催。以後2001年(平成13)「木花物語・風と出会った時」、2002年(平成14)「静かな時への誘惑」、2004年(平成16)「月マツモノタチヨ・越中オウラ節」2009年「手のなかの詩」等、写真展多数開催、写真雑誌にも掲載される。愛知県一宮市在住。

この作品はなかなか味わいのあるモノクロ写真です。写真にはドラマ性がなければいけないというのが僕の持論ですが、石川さんの作品はただ単にきれいに撮っているだけでなく、その中に日常のドラマを感じさせます。モノクロの神髄をよく捉え、個性的で独特な写真世界を作り上げていることも見事です。

<http://blog.goo.ne.jp/gookoborettemoyukumono>



「青夏 1999年8月」

第 13 回
「海を見ていた一房総の海岸物語一」(写真集・写真展) 飯田 樹 (いいた・たつき)

1941年(昭和16)千葉県生まれ。千葉大学教育学部卒業。1984年(昭和59)竹内敏信に師事。翌年から故郷房総の海と人をテーマに撮影を続ける。1994年(平成6)千葉県写真展グランプリ。1998年(平成10)日本写真家協会展優秀賞。写真展多数開催。2010年(平成22)第60回記念流形展竹内敏信賞受賞。日本写真協会会員、日本写真作家協会会員、流形美術会写真部委員、千葉県写真美術会顧問、千葉県写真連盟相談役ほか。千葉県東金市在住。

この作品は、千葉の房総の海をずっと撮り続けたものを一冊にまとめた作品集で、カメラワークがよく、海と人びととの関わりや、自然の表情を詩情豊かに写し出しています。その健康的な作風は現代の房総海岸に見るさまざまなドラマを表現しており、全編をとおして快い緊張感が伝わってきます。色彩的にも優れた作品です。



「古志の朝 8月 山古志村」

第 14 回
「古志の里II」(写真集・写真展) 中條均紀 (なかじょう・まさのり)

1952年(昭和27)新潟県生まれ。東京農業大学卒業。1986年(昭和61)写真活動を開始。1987年(昭和62)から山古志村とその周辺の風景や風俗を取材し、1999年(平成11)写真集「古志の里」、2004年(平成16)「古志の里II」刊行。同年10月23日の新潟県中越地震で壊滅的被害を受けた山古志村の震災前姿を記録する貴重な記録となった。同年新潟県長岡市にアトリエ“Shinla—シンラー”建設。写真教室、コンテスト審査員、講演等の活動を行う。日本写真協会会員。新潟県長岡市在住。

これは、作者が山古志にずっと通い続けて撮ってきた作品で、ふるさとの素晴らしい風景を見続け、なおかつそれを撮り続けて心に残る風景写真を作りあげたこと、中越の大地震の被害により昔のような棚田が二度と見られないのではないかと、そういう意味で山古志の文化財、自然の美しさが写真として残された大切な作品であると考え、いろいろな意味を込めて決定させていただきました。

<http://ameblo.jp/ateliershinla/>



「上州座繰り 2002年3月 群馬県勢多郡富士見村」

第 15 回
「薊の輝き」(写真展・雑誌掲載) 田中弘子 (たなか・ひろこ)

1942年(昭和17)東京都生まれ。1992年(平成4)から4年間関東デニス協会ジュニアニュース誌広報写真担当以後写真活動を続け、日本写真家協会展などで入賞を重ねる。1998年(平成10)から群馬県の養蚕業の取材を始める。2005年(平成17)「薊の輝き」としてまとめた写真展と雑誌に発表した後も活動を継続、富岡製糸場世界遺産登録推進運動やシルク関係の著作に作品が使用される。日本写真協会会員、日本カメラ財団JCIIフォトサロン会員。東京都小金井市在住。

この作品は、特別な技法を使って見せるのではなく、薊を生産する人々と薊との関係を究明に写し取っています。さらに薊がいかに成長し、美しい糸になって育っていくか、その過程での造形的な美しさや色彩美の両面を表現しながら、一つの物語に作り上げたところが素晴らしい作品でした。



「陝西省 韓城市 2000年4月(黄土高原の村)」

第 16 回
「黄土高原の村／満蒙開拓の村」(写真集) 後藤俊夫 (ごとう・としお)

1938年(昭和13)茨城県生まれ。茨城大学文学部文学科卒業後、茨城県立高校教員(英語)として勤務、写真部顧問をつとめる。1982年(昭和57)水戸市美術展に初入選。2001年(平成13)中国で独自の取材旅行を始め、2003年(平成15)から翌年にかけて写真展「黄土高原の村」開催、2006年(平成18)写真集「黄土高原の村／満蒙開拓の村」刊行。その後戦後の国内の開拓事業に目を向け、取材活動を続ける。日本写真協会会員、茨城県美術展写真部会員、水戸市美術家連盟会員。茨城県水戸市在住。

大版で映像効果をねらうような意図などはほど遠く、こじんまりしたつくりの写真集ですが、一見、一読、さらに何度か頁を繰るごとに、悠久の大地の中に吸い込まれて、いのちの根源にふれるような感動を覚えます。風土への渴仰と共生に運命を託した農民への共感が伝わってくるのです。



「蘭盆勝会2 長崎市鍛冶屋町、崇福寺 1977年9月」

第 17 回
「長崎フォトランダムー長崎ば撮ってさらき、半世紀一」(写真集) 小林 勝 (こばやし・まさる)

1926年(大正15)長崎県生まれ。旧制長崎県立長崎中学校卒業。海軍電測学校に進み、長崎外国語学校を経て親和銀行就職。1960年(昭和35)国際写真サロン初入選以後、国画会、二科展、視点展等で入選入賞を重ねる。1961年(昭和36)長崎県展文部大臣賞受賞。1994年(平成6)長崎市教育委員会文化功労表彰。2007年(平成19)長崎大学付属図書館に約4万枚のフィルム原板、プリント写真等を寄贈。2008年(平成20)長崎県民表彰特別賞。林忠彦賞受賞を契機に周防、瀬戸内の歴史に惹かれ周南市周辺の取材旅行を続ける。長崎県長崎市在住。

この方は81歳とは思えない非常に新鮮な目で長崎を見ておられる。現代の長崎とかつての長崎、その時間の併置、これは単に風景を撮るだけといった類のものでは決してなくて、時代の変遷、時代の変化を撮るという明確な意識が感じられる。長崎のとくに被爆の風景を知っている人にとっては複雑な思いがあるでしょう。その辺の心の動きみたいなものがこの写真の中に出ていていると思います。



「壊れた脳とともに生きる—山田規敏さんの暮らし」

第 18 回

「ロマンティック・リハビリテーション〜夢みる力・20の物語〜」(写真集・写真展)
大西成明 (おおにし・なるあき)

1952年(昭和27)奈良県生まれ。早稲田大学第一文学部社会学科卒業。1992年(平成4)写真集『象の耳』で日本写真協会新人賞受賞。1999~2000年(平成11~12)写真週刊誌で連載した「病院の時代—パラッド・オブ・ホスピタル」で1999年週刊現代ドキュメント写真大賞、2000年講談社出版文化賞受賞。他に「日本の川100」「ひよめき」「ザ・モンキー」(共著)『ホネホネたんけんたい』(共著)「人形記」(共著)など。東京造形大学教授。日本写真家協会会員。東京都狛江市在住。

大西さんは、非常にシリアスな問題を、深い人間の理解といったものをベースに誠実に淡々と撮っておられます。決してセンチメンタルに涙を誘うのではない、その辺のギリギリのところを見事に捉えており、大変優れた写真家だと思います。こういう作品が今日の大きな時代の記録として残り、生きていくのだらうと思うのです。大いに賞賛したいと思います。

第 19 回

「トオヌツ」(写真集・写真展・雑誌掲載) 小栗昌子 (おぐり・まさこ)

1972年(昭和47)愛知県生まれ。名古屋ビジュアルアーツ卒業。1995年(平成7)写真展「川のほとりで」開催。1999年(平成11)岩手県遠野市の土地と人に魅せられ移住。2005年(平成17)「百年のひまわり」で第3回ビジュアルフォトアワード奨励部門大賞受賞。2006年(平成18)日本写真協会新人賞受賞。2008~09年(平成20~21)写真展「トオヌツ」開催。2009年(平成21)写真集「トオヌツ」発行。2010年(平成22)「日本カメラ」1~12月号に「フサバナの山」連載。岩手県遠野市在住。

遠野に住んでいる方々の様々な側面を捉えています。作者が10年住み、その中でコツコツと撮っていったというだけあって、その周辺の方々との間に非常にはっきりとした、しっかりとした人間関係が生まれています。日本の奥深いところにある、日本そのものというものを捕まえようとする意識が、この作品の根底にあるのではないかと思います。



「田植えの後で」

第 20 回

「基隆」(写真集・写真展・雑誌掲載) 山内道雄 (やまうち・みちお)

1950年(昭和25)愛知県生まれ。1975年(昭和50)早稲田大学第二文学部卒業。1982年(昭和57)東京写真専門学校(現東京ビジュアルアーツ)卒業。森山大道に師事。自主ギャラリー・イメージショップCAMPIに参加し写真発表を始める。ストリートスナップの撮り手として活動を続け、東京をはじめ世界各地で街の中の人にカメラを向けシャッターを切り続ける。写真展開催、写真集出版多数。1997年(平成9)写真展「英領 HONG KONG」で第22回伊奈信男賞受賞。東京都杉並区在住。

台湾の「基隆」という街の状況を描写している写真が続き、街の状況を一望できません。斜めの画面や粒子を荒すなどの表現からは、活気のあるざわめき、喧嘩がそのまま伝わってきます。自分の想い出と経験、体験といったものを迫力あるスナップで撮影、素直に表現したドキュメンタリー写真で、見る者を釘付けにします。

<http://michioyamauchi.under.jp/>



「2011年1月31日 墨田区 八広」

第 21 回

「東京 | 天空樹 Risen in the East」(写真集)
佐藤信太郎 (さとう・しんたろう)

1969年(昭和44)東京都葛飾区生まれ。1992年(平成4)東京総合写真専門学校、1995年(平成7)早稲田大学第一文学部卒業。共同通信入社。2001年(平成13)同社退社、翌年フリーランスとなる。一貫して都市をテーマに写真を撮り続ける。写真集に「夜光」「非常階段東京—TOKYO TWILIGHT ZONE—」など。他に写真展多数開催。2009年(平成21)「TOKYO TWILIGHT ZONE—非常階段東京—」で日本写真協会新人賞受賞。2013年(平成25)林忠彦賞受賞により千葉市第30回教育文化スポーツ等功労者表彰受賞。千葉県千葉市在住。

スカイツリーを中心にした極めて都会的な風景写真集といえるでしょう。戦後の古い建物の先にはスカイツリーの上部が見えたりする、味わいのある写真集になっています。スカイツリーの建設をひとつの材料にしたから風景と時間の経過を見ており、東京の極めて重要な「ドキュメント」が全てこの中にあるといえます。

<http://sato-shintaro.com/>

<https://www.facebook.com/shintaro.sato.35>

<https://twitter.com/satoshintaro>

第 22 回

「遠くから来た舟」(写真展) 小林紀晴 (こばやし・きせい)

1968年(昭和43)長野県茅野市生まれ。1988年(昭和63)東京工芸大学短期大学部写真科卒業。1991年(平成3)に新聞社カメラマンを経て独立。2000年~2002年(平成12~14)ニューヨーク滞在。写真家としてだけでなく、小説執筆など幅広く活動。写真集に「homeland」,「days new york」,「SUWA」【はなはねに】「kemonomichi」など、著書に「ASIA ROAD」,「写真学生」,「父の感傷」,「十七歳」,「ツッピー」(バースデイ 3.11) (共著)、「メモワール 写真家古屋誠一との二十年」など多数。1997年(平成9)「DAYS ASIA」で日本写真協会新人賞受賞。東京工芸大学教授。東京都在住。

日本というものが地球の中でどういう所に在るのか、その神々というものが私たちの生きる今日にも存在していることが伝わってきます。あちこちの神事やそれにまつわるものが、自分の村や町にも「これはあるね」と感じられます。写真の表現や構成にも工夫があり、白黒やカラー、カラーの中でもハイキーに仕上げた写真、アンダーに仕上げた写真などが混じっていて効果的です。

<http://www.kobayashikisei.com/>



(左)「つぶろさし 佐渡・新潟県」
(右)「道ゆき 高千穂・宮崎県」

第 23 回

「Remembrance」(写真冊子) 笹岡啓子 (ささおか・けいこ)

1978年(昭和53)広島市生まれ。東京造形大学卒業。2001年(平成13)写真家北島敬三らと、写真家自身による自主運営ギャラリー「photographers' gallery」を設立参加。「Difference 3.11」を機に2012年(平成24)から2013年(平成25)にかけて写真冊子「Remembrance」を刊行。2008年(平成20)「VOCA展2008」奨励賞受賞。2010年(平成22)日本写真協会新人賞受賞。2012年さがみはら写真新人奨励賞受賞。

「Remembrance」とは記憶ということでしょうか。被災地の瓦礫の写真があります。この瓦礫の写真とそれが取り去られた後の静止した写真、そうしたものがよく表現され、時間的経過の記録がよくわかります。単にドキュメント写真、記録写真というものを超えて、記録の中、風景の中に人間の営みの凄さが感じられます。そういう意味で、時代の記録であり、自然の記録であり、自然の恐ろしさの記録であり、それに立ち向かう人間の力の記録であり、といった様々なことを感じさせてくれます。

<http://pg-web.net/>



「福島県双葉郡浪江町請戸 2013年8月2日」



「NEW YORK」

第24回
「STREET RAMBLER」(写真集) 中藤毅彦(なかふじ・たけひこ)

1970年(昭和45)東京生まれ。早稲田大学第一文学部中退後、東京ビジュアルアーツ写真学科入学、森山大道に学ぶ。在学中より、モノクロームの都市スナップショットを中心に撮影を続け作品を発表している。国内の他、東欧、キューバ、ロシア、アメリカなど世界各地を取材。作家活動とともに、新宿四谷三丁目にギャラリー・ニエブスを運営。2013年(平成25)第29回東川賞特別作家賞受賞。

この作品は、ニューヨークやパリ、上海、東京などを撮影しています。ニューヨークといえば1950年代のウィリアム・クラインの「ニューヨーク」という写真集は、フィルムの粒子をわざと荒らした感じで喧騒を表現し、日本の写真家たちも影響を受けました。中藤さんの粒子を荒らしたような写真が出てきたりすると懐かしさが込み上げてきます。白と黒のコントラストがありながら粒子が粗いというのは、平和な時代というより荒々しい時代を表現する効果があり、ニューヨークや東京のような大都会は、そういう写真を作ることはまだまだ有効だと思います。

-  <http://takehikonakafuji.com/>
-  <https://www.facebook.com/takehikonakafuji>
-  <https://twitter.com/nakafujitake>

周南市美術博物館は1995年(平成7)に開館しました。美術、歴史のほかに写真の常設展示室「林忠彦記念室」があり、本市出身の写真家林忠彦の作品や資料を展示しています。また常設展だけでなく企画展においても大規模な写真展を開催し、写真芸術を広く紹介しています。



「林忠彦記念室」

写真家林忠彦の芸術と生涯を紹介する常設展示室で、9つのコーナーがあります。



1. 譜
林忠彦の生涯を年譜で紹介

2. 想
秋山庄太郎、植田正治など交流のあった写真家のことばを紹介

3. 撮
「いま」を撮る、「ひと」を撮る、「とき」を撮ると題し、林忠彦の作風の変遷を、当時の雑誌「婦人公論」「小説新潮」などに掲載された作品で紹介



4. 継
アマチュア写真家の育成に力を注いだ林忠彦を記念して、平成3年に創設された「林忠彦賞」を紹介



5. 東海道
晩年の大作「東海道」を紹介
代表作2点と、撮影時に使用したカメラ、三脚、車椅子等を展示

7. ルパン
林忠彦が太宰治らを撮影した銀座のバー「ルパン」のカウンターを再現、雰囲気伝える。「太宰治」「織田作之助」「坂口安吾」を展示

6. 林忠彦資料
林忠彦が遺したさまざまな資料を、随時紹介



8. 映像コーナー
林忠彦の晩年の姿を「大いなる遺産—林忠彦の世界—」で放映

9. 作品展示
オリジナルプリント等を展示
随時展示替を行う

展覧会 周南市美術博物館でこれまでに開催された写真展を紹介します。(抜粋)

平成7年度(1995)

- ◆残された楽園 ネイチャーフォトグラフィー展
- ◆第5回林忠彦賞「追いつめられたブナ原生林の輝き」岡田 満
- ◆常設展 林忠彦コレクション「日本の家元」



林忠彦×
カール・マイダンス展

平成8年度(1996)

- ◆林忠彦×カール・マイダンス展
焼け跡からの半世紀—日米フォトジャーナリストの親た日本
- ◆第6回林忠彦賞「サバナが輝く瞬間」井上冬彦



秋山庄太郎展

平成9年度(1997)

- ◆美しい記憶 秋山庄太郎展
- ◆第7回林忠彦賞「ぼくは、父さんのようになりたい」井上 暖

平成10年度(1998)

- ◆立木義浩展「親子の肖像」
同時開催「立木義浩の世界 光の人、舌出し天使、エチュード、EVES」
- ◆第8回林忠彦賞「天空の民」清水公代
選考委員会特別賞「戦後の山村—学校区のみなざし—」近藤祐一



立木義浩展

平成11年度(1999)

- ◆緑川洋一展「山陽道」～歴史薫る陸の道と海の道～
- ◆第9回林忠彦賞「Personal View〔視線の範囲〕」渡里彰造



星野道夫の世界展

平成12年度(2000)

- ◆星野道夫の世界展 21世紀へのメッセージ—Alaska風のような物語
- ◆第10回林忠彦賞「塩の道 秋葉街道」竹林喜由

平成13年度(2001)

- ◆細江英公の写真1950—2000
- ◆第11回林忠彦賞「ニューヨーク地下鉄ストーリー」角田和夫
- ◆林忠彦賞歴代受賞作品展



細江英公の写真

平成14年度(2002)

- ◆オードリー・ヘップバーン ボブ・ウィロビー写真展
- ◆第12回林忠彦賞「静かな時への誘惑」石川博雄
- ◆秋山庄太郎追悼展「平成・昭和の美女／男の貌」

平成15年度(2003)

- ◆川端康成 文豪が愛した美の世界(川端康成撮影の写真作品)
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「日本の家元」



川端康成 文豪が愛した美の世界より
川端康成撮影の写真作品

平成16年度(2004)

- ◆第13回林忠彦賞「海を見ていた—房総の海岸物語—」飯田 樹
- ◆ハーブ・リッツ写真展
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「日本の画家」



ハーブ・リッツ写真展

平成17年度(2005)

- ◆第14回林忠彦賞「古志の里II」中條均紀
- ◆現代美術のABC ～アートはあなたのそばにある～
(佐藤時啓+Wandering Camera、澤田知子、野村仁、やなぎみわ、デイヴィッド・ホックニー写真作品)
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「長崎 海と十字架」



世界遺産写真展Ⅲ

平成18年度(2006)

- ◆第15回林忠彦賞「蘭の輝き」田中弘子
- ◆世界遺産写真展Ⅲ
- ◆第21回国民文化祭・やまぐち2006 美術展〔写真〕
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「織田廣喜」



第21回国民文化祭やまぐち2006
美術展〔写真〕

平成19年度(2007)

- ◆第16回林忠彦賞「黄土高原の村／満蒙開拓の村」後藤俊夫
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「東海道」

平成20年度(2008)

- ◆第17回林忠彦賞
「長崎フォトランドム—長崎は撮ってさらき、半世紀—」小林 勝
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「長崎 海と十字架」

平成21年度(2009)

- ◆第18回林忠彦賞
「ロマンティック・リハビリテーション～夢みる力・20の物語～」大西成明
- ◆常設展 生誕90年記念「林忠彦の世界」
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「若き修羅たちの里—長州路」



生誕90年記念「林忠彦の世界」

平成22年度(2010)

- ◆第19回林忠彦賞「トオヌップ」小栗昌子
- ◆岩合光昭写真展「かけがえのない地球 いのちの輝き」
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「カストリ時代」



岩合光昭写真展

平成23年度(2011)

- ◆第20回林忠彦賞「基隆」山内道雄
- ◆林忠彦賞20回記念写真展



林忠彦賞20回記念写真展

平成24年度(2012)

- ◆第21回林忠彦賞「東京 | 天空樹 Risen in the East」佐藤信太郎

川崎市市民ミュージアム(2012)

- ◆林忠彦賞20回記念写真展
林忠彦賞が20回を迎えたことを記念し、2011年の周南市美術博物館に続き、開催しました。



平成25年度(2013)

- ◆第22回林忠彦賞「遠くから来た舟」小林紀晴
- ◆周南市誕生10周年記念 岩合光昭写真展 「ねこ」



岩合光昭写真展「ねこ」

平成26年度(2014)

- ◆第23回林忠彦賞「Remembrance」笹岡啓子
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「若き修羅たちの里—長州路」

平成27年度(2015)

- ◆第24回林忠彦賞「STREET RAMBLER」中藤毅彦
- ◆第17回林忠彦賞受賞者 小林勝写真展「周防長門残照」

ブロンズ像 (裏表紙写真)

林忠彦賞受賞者に授与されるブロンズ像は、周南市出身の彫刻家、笹戸千津子氏によって制作されました。

笹戸千津子略歴

- 1948年(昭和23) 山口県周南市に生まれる
- 1970年(昭和45) 東京造形大学美術学科彫刻専攻卒業、同大学彫刻研究室にはいる
- 1971年(昭和46) 第35回新制作展に「き子」「腰かけるき子」初出品。以後毎年出品
- 1973年(昭和48) 東京造形大学彫刻研究室修了、彫刻家 佐藤忠良氏のアトリエで制作を始める
- 1974年(昭和49) 第38回新制作展新作家賞受賞
- 1976年(昭和51) 第40回新制作展新作家賞受賞
- 1977年(昭和52) 新制作協会会員推挙。「第1回彫刻6展」開催。以後、全国各地で個展、合同展を開催
- 1987年(昭和62) 第18回中原悌二郎賞優秀賞受賞
- 1993年(平成 5) 第7回神戸具象彫刻大賞展に招待出品、準大賞受賞
- 1998年(平成10) 「ブロンズの華 笹戸千津子展」開催(山口県・周南市美術博物館他全国6カ所巡回) 長野市野外彫刻賞受賞
- 1999年(平成11) 「佐藤忠良と笹戸千津子の足跡展」開催(滋賀県・佐川美術館)
- 2001年(平成13) 東宝宝塚ビルリニューアルオープンに伴いエントランスを飾るモニュメント「微風」制作
- 2004年(平成16) 「笹戸千津子彫刻展」開催(熊本県・つなぎ美術館)
- 2008年(平成20) 「笹戸千津子展 想いをかたちに」開催(宮城県・菅野美術館)
- 2011年(平成23) 「笹戸千津子 —継承するところぞし—」開催(広島県・泉美術館)
- 2012年(平成24) 「佐藤忠良と笹戸千津子 —帽子とチコ—」(中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館ステーションギャラリー)



ブロンズ像
笹戸千津子作「爽」

写真展

□東京展 富士フィルムフォトサロン

4月15日(金)→4月21日(木) 会期中無休
10:00~19:00(最終日16:00まで)
東京都港区赤坂9-7-3 東京ミッドタウン フジフィルム スクエア TEL(03)6271-3351
<http://fujifilmsquare.jp/>

□周南展 — 林忠彦の生誕地にある — 周南市美術館

5月6日(金)→5月15日(日) 月曜日休館
9:30~17:00(入館は16:30まで)
山口県周南市花島町10-16 TEL(0834)22-8880
<http://s-bunka.jp/bihaku/>

□東川展 写真の町 東川町文化ギャラリー

11月27日(日)→12月12日(月) 会期中無休
10:00~17:30(最終日15:00まで)
北海道上川郡東川町東町1-19-8 TEL(0166)82-4700
<http://photo-town.jp/>

編集・発行／林忠彦賞事務局

周南市美術館 〒745-0006 山口県周南市花島町10-16
TEL(0834)22-8880 FAX(0834)22-8886

<http://hayashi-award.com>



発行日／平成28年3月31日 印刷／大村印刷株式会社